

文脈)

今日の箇所は 56 章の後半の続きとなります。

当時、イスラエルが繁栄しており、神の見張り人であるべき王や指導者たちがその責任を放棄して、自分勝手にあゆみ、まやかしの希望を抱いて自分の利益ばかりを求めて歩んでいました。

1) 悪い時代の義人たち

すると、そのような支配者が治める時代に、神様の前で正しく誠実に生きようとしていた人たちはどのような状況になるのでしょうか。

彼らは例え死んだとしても、誰にも心を留めてもらえず、気づいてももらえない。そのような状況に陥ってしまいます。

神様は時に、正しい人が顧みられることなく死んでいくことを良しとされます。正しい歩みをし続けているのに、この世で一切の報いを受けることなく、誰にも顧みられずに死んでいく。そんなある意味で理不尽と思えるような状況を、神様がそのままにしていることがあるのです。

なぜでしょうか？ それは例えこの世で報いを受けることなく無駄死にと思えるような死を迎えたとしても、その死はただの死ではなく、本当のわざわいがくるまいの救いの死であり、義人に本当の平安を与えるための出来事だからです。1-2 節を読みましょう

57:1 「義人は滅びるが、心に留める者はいない。誠実な人は取り去られるが、気づく者はいない。義人は、わざわいを前にして取り去られる。

57:2 その人は平安に入り、まっすぐに歩む人は、自分の寝床で休むことができる。

神様を信じ、正しい歩みをしようとした人にとって死とは絶望ではなく、本当の平安に入れられることであり、魂の安息を得る出来事なのです。

だからこそ、パウロはこのように言いました。ピリピ人への手紙 1 章 21 節と 23 節

1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。

1:23 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。

パウロにとってこの世で生きることよりも、この世をさってキリストと共に生きることのほうがはるかに望ましいことでした。なぜならば、そこには本当の平安があり、本当の安息があったからです。では、なぜ、パウロは自殺をしなかったかという、22節で彼はこのようにいっています。

1:22 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。

パウロにとってこの世でキリストのみ心を実行するために生きるとは、キリストの働きの実を結ぶことにつながるので、パウロはこの世で生きるとも、死んでキリストと共にいることと同じぐらい価値があることだと思っていたのです。

みなさん、この世の人たちに見向きもされずに死んだとしても、それは本当の平安、本当の安息に入れられることなので、私達は何も悲しむ必要がありません。でも、この世に置いて【主】のみ心を実行していくことも、それと同じぐらい価値があることなのです。

2) 姦淫を犯すイスラエル

しかし、このイザヤの時代の人々は、【主】を信じ、【主】の前に誠実に歩むことの価値をわかっておらず、霊的姦淫の罪を犯していました。

3節から11節までは、イスラエルの人たちが犯していた過ちを神様が強烈に指摘している箇所となっています。

① あなたがたは【主】に背いた遊女である

3節、4節を読みましょう。

57:3 しかし、あなたがた、女卜者の子ら、姦夫と遊女の子孫よ。ここに近寄れ。

57:4 あなたがたは、だれをからかい、だれに向かって口を大きく開き、舌を出すのか。あなたがたは背きの子、偽りの末裔ではないか。

神様にとってイスラエルの人たちの状態は「姦夫」であり「遊女」でした。

「姦夫」も「遊女」も配偶者を裏切り、結婚の秩序を乱す人のことを指します。

神様とイスラエルの関係は本来、互いに愛し合う結婚関係のようなものでした。でも、イスラエルは神様を裏切り、偶像との霊的不倫をしていたのです。4節の「あなたがたは、だれをからかい、だれに向かって口を大きく開き、舌を出すのか。」という言葉に注目してください。ここでいう「からかう」とは、ヘブル語では「遊ぶ」ことを意味しています。

最近聞く、不倫をする人の言い訳にはこのようなことばがあります。

「あの人とは本気じゃなくて、浮気だから赦してほしい」

みなさん、このことばの意味がわかりますか？

「あの人とは本気じゃなくて、浮気だから赦してほしい」・・・つまり、「自分が本気で好きなのは、あなたであって、あの不倫相手はただの遊びでしかないから赦してほしい」といことです。あとは、ちょっと「間が指して」みたいな言い訳もよく聞きますね。

みなさん、【主】に対する浮気は、このような遊び心から始まるのです。

自分が本当に信じているのは【主】なる神様だけ。

神社のお祭りには屋台とかがいっぱい出ていて、楽しそうだから行ってみるか。とか、神様を信じているけど。学校で占いが流行っているから、遊び半分で行ってみるかとか。そうゆう心の遊び。別の言い方をすると妥協によって【主】に背くことがはじまっていくのです。

みなさん、神様に対して妥協していないでしょうか。

この世の偶像に対して間を作らないようにしましょう。

神様に対して徹底的に誠実に歩むこと。それが【主】に対して遊女にならないための道なのです。

② あなたがた豊穡を求めて子どもを生贄に捧げている

次に5節を読みましょう。

57:5 あなたがたは、樾の木の間や、青々と茂るあらゆる木の下で、身を焦がし、谷や、岩の裂け目で子どもを屠っているではないか。

「樾の木の間や、青々と茂るあらゆる木の下で」というのはイスラエルの人たちが豊かさを求めている事を現しています。

豊穰の神といわれる偶像は世の中にいっぱいあります。モアブ人が信仰していたモレクという偶像も、豊穰や繁栄、成功をもたらす神と信じられていました。そして、そのモレクを信じていた人たちは、自分たちが豊かになるためになんと子どもを生贄として捧げるようなことをしていたのです。そして、イスラエルの人たちも子どもを生贄にささげて、自分たちが豊かになることを求めていました。ヤコブ 1 章 15 節にはこのようなみことばがあります。

ヤコブ 1:15 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

神様のみ心を実行する目的があって、そのために豊かさを求めるのならば、それは罪ではないと思います。ジョージ・ミュラーという人は、多くの孤児を養うため【主】に経済的な助けを求めていました。そうゆうのならば良いのです。でも、何の目的もなく、ただ欲に促されて豊かさだけを求めていくとき、本当に大切なものを犠牲にしてしまうことがあるのではないのでしょうか。今時代、経済的な豊かさを求める人は多いと思います。私だってお金持ちになれるならなりたいと思います。でも、欲望のまま豊かさだけを求めていくのならば、それは大事なものを失う偶像礼拝につながっていくのです。

③ あなたは間違った礼拝をしている

次に 6 節から 8 節を読みたいと思います。 まずは 6 節をよみましょう。

57:6 谷川の滑らかな石があなたの分、それら、それらこそが、あなたの受ける割り当て。それらに、あなたは注ぎのぶどう酒を注ぎ、穀物のささげ物を献げているが、こんな物で、わたしが慰められるだろうか。

川には転がることで削られた丸い石があります。丸い石は見た目がきれいだったり、肌触りがよかったりしますが、イスラエルの石でできた建物。例えば家を立てたり、しっかりとした祭壇を築いたりするには使えません。例えば石を土台に使うとするならば、川に落ちているような滑らかな石ではなくて、しっかりとした角がある角張った石が必要です。しかし、イスラエルの人たちは、見た目はすべすべできれいだけど、実際には役立たない滑らかな石のようなものにぶどう酒を注ぎ礼拝をしていたのです。神様の目にはイスラエルの人たちがしていた偶像礼拝は、まさにそのようななんの役にも絶たない間違った礼拝でした。

何よりも彼らはまさに姦淫の罪といえるような偶像礼拝をしていました。そのことが描写されているのが7節、8節です。

57:7 そびえる高い山の上に、あなたは寝床を設け、そこにも上って行って、いけにえを献げた。

57:8 あなたは、扉と柱のうしろに、自分を記念する像を置いた。あなたはわたしを捨てて裸になり、そこに上って自分の寝床を広げ、彼らと契りを結び、彼らの寝床を愛し、彼らの象徴物を見た。

寝床を設けというのは、ただの睡眠のことを指しているのではなく、偶像の前で性的な行為に及んだことをさしています。イスラエルの人たちは高い山の上や、自分の家の扉と柱の後ろで、性的行為の伴った偶像礼拝をしていたのです。

8節の「扉と柱のうしろに、自分を記念する像を置いた」というのは、男性器をかたどった偶像をおいて、そこで性的な偶像礼拝をしたということです。

みなさん、イスラエル人の扉と柱は、本来どうあるべきだったか知っていますか？そこは本来で「シェマー」と呼ばれる神様のみことばを刻むべきところでした。

申命記6章では以下のようにいわれています。

6:4 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。

6:5 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。

6:9 これをあなたの家の戸口の柱と門に書き記しなさい。

「【主】は私たちの神。【主】は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」

当時のイスラエルの人たちは、これが刻まれている扉と柱の後ろに男性器を象徴する偶像をおき、性的偶像礼拝に及んでいたのです。

これは人間に例えるのならば、結婚の誓約書と結婚式の写真が飾ってあるところで他の人と不倫をしているようなものです。

これが神様にとってどれほど屈辱的で許し難い行為かみなさんにもよくわかると思います。

神様は、私達に「心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、

【主】を愛しなさい。」と命じておられ、これを実行することを求めておられるの

です。みなさんも、このことを知っておられると思います。

では、みなさんは、このみことばをこのみことば通りに実行しておられるでしょうか。このみことばを知りながら、お金やこの世の快樂など、別のことを求め、それにのめり込んではいないでしょうか。

【主】は私達に、【主】だけを全身全霊で愛することを求めておられるお方です。

④ あなたは執拗に偶像を求めている

イスラエルの人たちは偶像礼拝の罪をただ犯すだけでなく、その偶像を執拗にもとめていました。9節、10節を読みましょう。

57:9 あなたは油を携えて王のところまで旅し、香料を増し加え、使者たちを遠くまで送り出し、よみにまでも下らせた。

57:10 あなたは、長い旅に疲れても、『あきらめた』とは言わなかった。あなたは元気を回復し、それで弱らなかった。

この箇所はこの言葉の通り、イスラエルが諸外国の王の救援を求めて、諦めずに、旅をした。と理解することもできますが、王を指すヘブル語は、先程いった「モレク」という偶像の名前に近い言葉が使われています。そのため、イスラエルが偶像礼拝をすることを諦めずに求め続けていたと理解することもできます。

どちらにしても、イスラエルの人々は【主】以外なものを執拗なまでに求めたのです。イスラエルの周りは荒野や砂漠ですから、本来旅をすると疲れ切って、力を失うはずなんですけども、彼らは偶像や諸外国の力に夢中になっていたため、それらに頼ることにあきることも、疲れることもなかったのです。

私達も何か一つのことに夢中になると、疲れをわすれてのめり込むことがあります。

でも、みなさん、私達が本来のめり込むべきなのは【主】だけなのです。

みなさんは、今どれほど【主】に対して夢中になっているでしょうか。

イスラエルは偶像や諸外国の保護を失うことを恐れていました。だから、それらを必死にもとめていたのです。でも、【主】はそんなイスラエルに対していわれます
11節

57:11 あなたは、だれにおじけ、だれを恐れて、まやかしを言うのか。あなたはわたしのことを思い出さず、心にも留めなかった。わたしが久しく黙っていたので、

わたしを恐れないのではないか。

みなさん、私達が本来おそれるべきなのは、【主】だけなのです。

みなさんは、【主】を恐れて歩んでいるでしょうか。

みなさんの礼拝が【主】に受け入れられるものになっているかどうか。

そうゆう恐れをもっているでしょうか。

私達はいつも敬虔な【主】への恐れをもっていたいと思います。

⑤ あなたがたの義は役に立たない

そして、最後に【主】はイスラエルの過ちを12節、13節のように言われます。

57:12 わたしは、あなたの義のわざと、あなたの行いの数々を告げよう。しかし、それらはあなたにとって役には立たない。

57:13 あなたが叫ぶとき、あなたが集めたものどもに、あなたを救わせよ。風が、それらをみな運び去り、もやがそれらを連れ去ってしまう。しかし、わたしに身を寄せる者は、地を受け継ぎ、わたしの聖なる山を所有することができる。

どんなにイスラエルがモレクや他の偶像を求めても、それらに可哀想な子どもたちを生贄としてささげたり、偶像礼拝をささげるために長旅をしたりしたとしても、神様の裁きの前では一切役に絶たないのです。

この世の富や快樂・・・そういった偶像により頼んでも、私達は救われることはできません。私達を救うことができるのは【主】なる神様だけです。

結論)

だからこそ【主】は「わたしに身を寄せる者は、地を受け継ぎ、わたしの聖なる山を所有することができる。」宣言され、最後に14節のように言われています。

57:14 ——主は言われる——盛り上げよ。土を盛り上げて、道を整えよ。わたしの民の道から、つまずきを取り除け。」

イスラエルの人たちが【主】の身元へ行く道は、偶像礼拝の罪によって穴があき、つまずきとなる石が散乱し、ボコボコになっています。

だから【主】はその罪を取り除き、【主】のもとへ行く道を整えよ。と言われるの

です。これは神様からの真の礼拝への招きのことばです。

みなさんの心や生活の中に、まことの礼拝を妨げる余計な穴やつまずきの石はないでしょうか。神様ではなく、この世の富や快樂に平安を求める心はないでしょうか。

何の目的もなく、ただ欲望のままに豊かさを求める心はないでしょうか。

それらは偶像礼拝に通じる道であり、何の役にも絶たない道です。

そのような思いを捨て、心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、【主】を愛する礼拝をささげていきましょう。

私達の全てを用いて捧げる、全力の礼拝、これこそ私達がなすべきことです。